

Title	現代の時代ものフィクション作品における「疑似古語」についての日中対照研究
Author(s)	Liu, Lu
Citation	大阪大学, 2013, 博士論文
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/26221
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

論文内容の要旨

〔 題 名 〕

現代の時代ものフィクション作品における「疑似古語」についての日中対照研究

学位申請者 刘璐 (LIU LU) 印

現代の多くの国において、古い時代を舞台とするフィクション作品が数多く存在する。例えば日本の時代小説や時代劇ドラマなどは、昔から多数の読者や視聴者を擁している。これらの作品に登場する古代の人物像は、現代を舞台とする作品に登場する現代の人物像がほとんど使用しない古めかしい喋り方をしていることが多い。しかし、このような古代語らしい喋り方はその作品に描かれた時代に見合う実際の古代語ではなく、古代の雰囲気を醸し出すために作り出されたものである。そこで、本論文では、時代ものフィクション作品に現れる、現代になって作られた「古めかしい言葉づかい」を「疑似古語」と呼び、それを取り扱う。以下、各章の概要をそれぞれ述べる。

第一章では、研究の背景と研究意義を述べ、本論文で提唱する「疑似古語」という概念の定義と特徴について説明し、先行研究及び関連研究を紹介し、本論文の位置づけ及び目的を示した。「疑似古語」とは、現代人が書いた、或いは制作した古い時代を舞台とするフィクション作品の中で、古めかしさを感じさせられる登場人物の台詞や、それを聞いた現代人が古い時代の人間を思い浮かべる言葉づかいのことである。いくつかの関連研究では「疑似古語」の存在が指摘されているが、それ以上の考察は行われておらず、「疑似古語」を中心として取り扱った先行研究は現在のところ、一件しかない。これでは、「疑似古語」の全体像を把握するには不十分だと思われる。

近年、日本と他国の間では、時代ものフィクション作品の国際交流が大変活発になっている。翻訳者が自国と他国の「疑似古語」をどれくらい理解しているかは、台詞の翻訳の質を大きく左右するだろう。また、日本語教育の分野においても、教育の多様化に伴い、アニメや漫画の台詞を用いる授業が増えつつあり、人気ジャンルの一つとして、時代ものフィクション作品も導入されている。こういった背景下で、「疑似古語」の研究は翻訳と外国語教育のいずれの分野にも貢献できると思われる。

本論文の主な目的は、①現代日本語と現代中国語のそれぞれの「疑似古語」の使用の様相を明らかにすること、②将来「疑似古語」を外国語としての日本語教育と中国語教育に導入するために現状調査を行うこと、③日中両言語の「時代ものフィクション」作品における「疑似古語」の翻訳の現状と問題点を調査して改善策を提示すること、の三点である。

第二章では、日本語の「疑似古語」について考察を行った。まず、現代語の国語辞書において、「疑似古語」はどのように扱われているのかを詳しく調査した。複数の辞書では「古風」と注記される語が見られるが、調査した結果、これらの語の中には一部の「疑似古語」が含まれているが、「疑似古語」ではない語も多く含まれていることが分かった。また、辞書によって「古風」と注記される語はかなり異なる。そこで、「疑似古語」82語に対して、3種類の国語辞書における認識と扱い方を調査した結果、いずれの辞書においても収録されていない語が存在する上、収録されている語に付けられる位相情報も辞書によって異なっていた。以上から、国語辞書の「疑似古語」に対する認識には大きな不一致が存在することが分かった。日本語の国語辞書がどのように「疑似古語」を扱っているかによって、外国人日本語学習者の「疑似古語」についての認識は変化すると考えられるため、現状を改善するために、「疑似古語」の実際の使用様相を詳しく調査する必要がある。そこで、第2節では、異なるメディアの多数の時代ものフィクション作品を用いて、頻繁に見られる「疑似古語」を「語レベル」、「文レベル」、「文法レベル」ごとに、実際の作品での用いられ方を詳しく考察した。特に、登場キャラクターの属性や性格と深く関わる人称代名詞及び文末表現を中心に、古語としての本来の意味用法と「疑似古語」としての意味用法の相違点を示し、更にそれぞれの「疑似古語」が、いかなる人物像にいかなる使用場面で用いられるかなどの具体的な分析も行った。例えば、一人称代名詞の「妾」^{わらわ}は、本来、主に武家の女性がへりくだって自分を指す際に用いる謙称だったが、「疑似古語」としての場合は、將軍

の正室などのような身分の高い武家女性が自分の地位を示すために用いるのがほとんどである。

第三章では、中国語の「疑似古語」について考察を行った。日本語と同様、まず国語辞書における「疑似古語」の扱い方を調査した。中国語の国語辞書では、日本語の「古風」のような位相項目が存在していないことが分かった。さらに2種類の国語辞書を詳しく調査した結果、収録されている「疑似古語」の中に位相情報が示されていないものが多く、語義用法について説明が不十分なところも散見された。そこで、第二章と同様に、中国語で創作された時代ものフィクション作品を用いて、中国語の「疑似古語」72語に対して、各語の意味用法、使用場面や使用人物像との関係などを明らかにするための分析を行った。「疑似古語」の中で、古い人称代名詞と呼称詞の割合が大きいという特徴は日本語と共通しているが、単音節語の多用という中国語にしか見られない特徴もあった。

第四章では、第二章と第三章の考察を基にして、両言語の「疑似古語」について、いくつかの視点から対照分析を行った。まず、両言語のそれぞれの国語辞書における「疑似古語」の扱い方の類似点と相違点を示した。その次に、「疑似古語」の習得の視点から、外国人学習者が他言語の「疑似古語」を正確に理解できるようにするには、外国語学習用辞書の役割が非常に大きいと考えられるため、両国でよく利用されている11種類の日中・中日辞書を対象に、収録される「疑似古語」の割合及び説明の比較分析を行った。その結果、両言語の学習者にとって、現時点で出版されている日中・中日辞書は、お互いの「疑似古語」を習得するのにほぼ役立たないどころか、時には不適切な例文によって、学習者に誤解を与える恐れも潜んでいることが分かった。そして、日中同形疑似古語の辞書における扱い方を調査し、両言語のそれぞれの意味用法を比較し、類似点と相違点を示した。また、日中両言語の「疑似古語」が持つ使用上の全体的特徴についても比較した。

第五章では、両言語の「疑似古語」について、実際の翻訳のされ方、および問題点の有無という二点の実態調査を行った。その結果、日本語から中国語への「疑似古語」の翻訳の現状について、訳語の統一性が低く、誤訳や訳漏れが多く見られ、また不適切、不自然な訳が存在し、全体的に見ても良質な翻訳とは言い難いことが分かった。その一方で、中国語から日本語への場合、日本語の「疑似古語」のほうはバリエーションが豊富であるため、翻訳の際に適切な訳語を見つけることが難しくないと考えられる。実際に、日本語から中国語への翻訳に比べ、中国語から日本語への翻訳の質は全体的にレベルが高いことが分かった。しかし、依然として「疑似古語」は現代語より扱いにくいことは明らかで、作品によっては「疑似古語」の翻訳の仕方が不統一であった。中には、全く扱われなかったり、現代語に翻訳されたりするケースもしばしば見られる。特に、映画とテレビドラマの字幕の翻訳において、このような傾向がより顕著である。このような翻訳の現状を根本的に改善する方法として、一つは国語辞書及び外国語学習用辞書における「疑似古語」に対する認識と扱い方を見直すことが考えられる。もう一つは、翻訳者個人が日中両言語の「疑似古語」の知識を得るために積極的に時代ものフィクション作品を読んだり、視聴したりすることである。しかし、この二つの方法はいずれも容易ではなく、長い時間が必要とされる。そこで本論文では、翻訳者のサポートとして、また、将来辞書を編纂する際の参考として、まず日本語と中国語の一部の「疑似古語」に対して、日中と中日の対訳リストをそれぞれ作成した。この二つの対訳リストは各「疑似古語」の品詞と意味だけでなく、実際にどのような人物像がどのような場面で使用するかについてもできる限り詳しく示す。更に、適切な訳語と翻訳する際の注意点なども提示する。

第六章では、全体のまとめと今後の課題について述べた。本論文は「疑似古語」の全体像を掴むために、作品の舞台やジャンルの異なる時代ものフィクション作品を幅広く調査するようにした。しかし、今回は日本語と中国語両方の「疑似古語」について考察を行ったため、調査した作品の数や各語の使用様相の分析について、まだ不十分な点が存在する。今後、用例を更に増やし、各語の具体的使用状況をより明確に示し、日中「疑似古語」の対訳リストをより充実させ、その成果をウェブページなどで公開する予定である。また、本論文は主に現在、ある程度定着した「疑似古語」の意味用法を考察するものであるため、日本語と中国語のそれぞれの「疑似古語」の起源及び変化については触れていない。今後、両言語の「疑似古語」はどのように生じたのか、初期の「疑似古語」はどのような特徴を持っていたのか、意味用法の変化は見られないのか、といった歴史的考察も加えたい。さらに、「疑似古語」の学習を日本語教育及び中国語教育へ導入する実験的研究も行いたい。

論文審査の結果の要旨及び担当者

氏 名 (LIU LU)	
	(職) 氏 名
論文審査担当者	主 査 教授 岩根 久
	副 査 准教授 小門 典夫
	副 査 教授 木内 良行
論文審査の結果の要旨	
<p>LIU LU氏の学位請求論文「現代の時代ものフィクション作品における「疑似古語」についての日中対照研究」は、小説・テレビ・映画・漫画・アニメなどの多様な表現手段を通して日中両国で一般に受容されている「時代もの作品」において古めかしさを醸し出す特定の言葉づかいを、実際に過去に使用された言葉である「古語」と区別して「疑似古語」と名づけ、数多くの作品の使用例を分析することにより、日中相互の疑似古語の特色を明らかにした上で、相互の言語における疑似古語理解を促進する方略を提案した意欲的論文である。</p> <p>本論文は6章構成となっており、第1章では本論文における「疑似古語」の定義、および先行研究との関連が論じられ、扱う疑似古語項目の選定方法が示される。第2章では日本語疑似古語の日本語国語辞書での記述、および作品における使用の様相が論じられ、それと対照的に第3章では中国語疑似古語の辞書での記述、および使用の様相が論じらる。第4章では、前章の議論を踏まえた上で、日中両言語における辞書での扱いと使用の様相が比較される。第5章は日中両言語の翻訳作品を疑似古語を中心に分析しつつ、疑似古語の翻訳のあり方が検討される。終章の第6章では本論文の成果と今後に向けた課題が示されている。</p> <p>本論文の第1章で論じられていることであるが、フィクションの登場人物の台詞として表出される疑似古語は、近年盛んに研究されつつある役割語と密接な関係がある。役割語がフィクションという枠組の中で演じられるキャラクターとの結びつきを意識した名称であるのに対し、疑似古語は「時代ものフィクション」という枠組そのものに関係する名称である。登場人物は「殿」であったり「奥方」であったり「家臣」であったりする以上、疑似古語はキャラクターと結びついて表出される役割語でもある。本論文の大きな成果の一つである日中疑似古語リスト（第5章）は、個々の表現の意味の説明のみならず、可能な限り使用者と使用場面を特定し役割語としての機能も明確にしている。</p> <p>上述の日中疑似古語リストが端的に示しているように、本論文はその成果が実践的役割を果たすべく企図されている。これは、近年、日本の映画やアニメ、ドラマなどから日本語に関心を持ち、日本語の習得を目指す学習者の増加に配慮した上でのことである。彼らの関心の対象となる作品は役割語に満ちており、日本語母語話者であれば容易に理解できることがら、彼ら外国人学習者にとっては難解となっている。その代表的ジャンルのひとつが時代ものフィクションである。本論文は、そこで使用される言葉である「疑似古語」を理解するための方略を明らかにすることで、役割語を含んだ幅広い日本語習得への道筋を示そうとしている。</p> <p>審査の過程で、本論文が対象とする「疑似古語」の定義が必ずしも明確とは言えず、結果として全体の議論が曖昧になっている、先行研究と本論文の議論の関係が十分整理されるに至っていない、また論文の成果のひとつである日中疑似古語リストがこの状態では十全とは言えず実践的な使用のためにはさらに整備の必要がある等の意見が出された。しかしながら、膨大な量の日中の時代もの作品を疑似古語という独自の観点から根気よく分析し、日中両言語における疑似古語の様相を明らかにするとともに、実践的価値の高い疑似古語リストを提案したことは評価に値する、という点では審査員間で意見が一致した。</p> <p>以上のように、本論文は博士（言語文化学）の学位論文として十分価値のあるものと認める。</p>	